

## 教師は、もっと実行力と意欲を

石井： いよいよ実践が始まりまして、各地の幼稚園、保育園や特殊学校を回り、私の教育法を理解、実行してもらおうようにしたんです。ところが、この特殊学級へ行ってみましても、漢字を教えている所はありませんね。私がいくら「漢字の方がよく覚えますよ」と言ってもダメなんです。いまの先生方には、実践力に富む、意欲のある先生がほんとに少ないと思います。

その点、島根県出東小学校の特殊学級の柳楽寛子という先生は、私の著書『石井式漢字教育革命』を読んで、「カナよりも漢字の方が覚え易い」と知って、すぐ実行した。実に実践力に富む先生だと思います。子供が漢字を書き出して、目が輝いてきたと言って、先生もいよいよ張り切っています。(第三章参照)

山田： 女の先生ですね。女の先生の方が割り合い度胸がありますね。よいと思ったらすぐ実行してみる……。

石井： そう言えば、辻昌子さんという先生もいました。この先生は、今から二十年近く前、特殊学級の漢字教育について発表しています。私が実践を始めてまだ十年になるかならないころの話です。

神戸市立大橋中学校で特殊学級を担任してまして、私の著書『私の漢字教室』を読んで、それによって漢字教育を実践したんです。非常にいい成果が出て、教育委員会主催の研究会で発表したんですよ。私も期待していたんですが、間もなく結婚されて先生をやめてしまわれました。

山田： それは残念ですね。

石井： 実は、例の“縦の木学園”の宮本三郎園長さんというのが、そのころ大橋中学校の数学の先生をしていらっしやいましてね。数学の先生ですが、漢字教育に大層熱心で、この先生が辻先生に推めて、それで辻先生がやったというわけなんです。この宮本先生は、兵庫県の教育功労者として表彰されまして、今から七、八年前、縦の木学園の園長になりました。

それで「園長になったから、石井先生、一つ『縦の木』の子供たちを指導してくれないか」と言ってこられました。

ここの子供は皆重度の脳障害児や精薄児で、知能指数も測定不可能というような子供が多くいました。前にも言いましたように縦の木村という村の中に寝泊まりして、先生方が生活を共にしながら、教えているわけです。けれどもまた、この先生方にも脳性

マヒなどの身障者がいるんです。ですから不自由な体で、顔がひきつれるような症状を持った者が、大変な努力をして、大学教育を受けて、立派な先生になって、同じ不幸を持った子供たちの教育に当たっていらっしゃるわけです。

まあそういうわけで、園長に「来ないか」と誘われ、私は気軽に引き受けて行きましたけれど、初めて子供たちに会ったときに、今までの特殊学級の子供たちとはずっと違った、重度の障害児、精薄児の顔を見て、思わず息を飲みました。「話そうと考えてきた話はとても通じまい」そう思って、狼狽しそうな自分を必死にこらえたあの時の気持は、今でも、汗が出る思いがするほど、鮮かなものがあります。それでも気を取りなおして、話を始めました。

実に長い一時間でした。教室の周囲に飼っている鳥や獣の名前を漢字で黒板に書き、その動物について話をしました。しかし、聞いてくれているのか、どうか、まったく反応がわからなくて不安でした。さて、時間の終わりに、黒板の漢字を尋ねてみますと、驚いたことに読むんですよ。

話の間にちゃんと覚えたんですね。それで私は思いを新たに、よしこれならいけるというので、園長にもう一回やらしてくれ

と言って、それから一、二か月後に訪問しました。この時、私はサルカニ合戦のお話の用意をして参りました。カードを作りましてね。猿、蟹、蜂、臼、栗、この五つの字を二十センチ四方くらいのカードに書いたものを用意しました。そしてそれを人形芝居の人形の代わりに使って「山から猿が降りてきて」とか、「蟹は川から上がってきました」とか、ゼスチュア入りで始めたんです。そして話を終わらして、この五枚のカードを一枚ずつ取り出して尋ねてみました。すると驚いたことには、間違っ読む人は一人もいないんです。園長はもうびっくりして見ていましてね。私も驚くやら、感激するやらでした。

私はそれ以来、人間というものは、生命力さえある限り、漢字の覚えられない子供はいない、生きて呼吸ができる以上は漢字が覚えられないことはないんじゃないか、という信念を持つようになりました。事実、私が直接指導しているのではありませんが、重度の脳障害児が毎日一字ずつ漢字を覚えていった実例があります。(第一章『ある脳障害児の成長の記録』参照)これは、一歳八か月のとき、ダンプカーにはねられて……。

山田： ダンプカーにはねられて

石井： そうです。ダンプカーにはねられて、頭骸骨が陥没するという致命的な重傷を負いました。普通なら即死ですよ。何日間か意識不明の重体で、やっと奇跡的に命をとりとめたんですが、それだけに後遺症もひどかったわけです。この父親に会ったのは、教えるために行ったときが初めてで、それからもう一回、都合二回だけです。この父親から八か月くらいして手紙がきました。「ぜひこのよくなった娘を見てもらいたい。八か月前とは違った子供を先生に一度みせたいから東京へ連れて行く。だから、会える日を知らせてくれ」と言ってきたんですよ。そのころちょうど金沢に行く用事があったものだから「こちらから出かけて行く」という返事を出しました。最初に会ったのは七月七日、七夕の日でした。それから年が変わって、三月に金沢に行く途中で、一時間くらい下車して駅の近くの喫茶店で、親子に会いました。

ちゃんと挨拶もりっぱにできますし、何よりも表情が明るい。父親と話しながら様子を見るのですが、母親とにこやかに話をかわしているのです。最初の印象とすっかり変わって特殊児童とは思えない態度なんです。そして改札口で別れるときに、「うちの子は、おかげさまでこのようになって明るい希望を持つことができ

ましたけれど、世の中にはこういうお子さんがたくさんいて、悩んでいる父親や母親のことを思うと、自分一人だけが喜んでいられないという気持ちでいっぱいです」と、私に語ったことが印象深かったものですから、その話を『幼児開発』の編集長に話しましたところ、早速、それを雑誌に書いてくれということで発表したものです。

これは、この本の中にも冒頭に書きましたが、本当にまだ指導を始めて八か月間の、短い間のレポートです。この子は今は三百以上の漢字を覚えています。

山田： それじゃあ普通児以上ですね。

石井： 普通児でも三百字の漢字ができない子供はいっぱいいますからね。

山田： 私もまず自分の子供にやってみなければいけませんね。

石井： 漢字は喜んで覚えますよ。そしてね、本当に意欲をもってやりますからね。一日に一文字覚えることくらいは、たやすいことなんです。そして、漢字を覚えて、これを読むということは、大変な喜びなんですね、どんな子供でも。